

好評をいただいている青木裕次氏のエッセイを、今号よりタイトルも新たに本紙面に掲載することになりました。バックナンバーは本会ホームページでも掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

逆転

お

正月の楽しみは、何と言っても「箱根駅伝」。駅伝は、ただ走るだけの競技ですが、そのストイックさが切ないのです。

それ故に一編のドラマを見る思いが募るのです。繰り上げスタートで、仲間や往路・復路のタイムの順位・記録への一喜一憂。シード各区间や往路・復路のタイムの順位・記録への一喜一憂。シード権争いの行方。そして総合優勝の結末。今年の「箱根駅伝」にも様々な物語が生まれました。中でも十区最終ゴールでの逆転劇は予想だにしていなかった展開で、多くの方々の記憶に鮮烈に刻まれたことと思います。十区のスタート時点で、1位と2位の差は3分以上、距離にして千メートル以上の差があり、誰もが、このままの順位でゴールすると思っていました。しかし、ゴールまで数キロという所で1位と2位が逆転し、そのままゴールとなったのです。勝者にとっては歓喜と感動、敗者にすれば悔恨と激痛の逆転であった筈です。それ以外での順位やシード権争いでも多くの逆転がありました。それぞれの逆転を為し得た人には惜しみない賞賛が送られるでしょうが、逆転を余儀なくされた人達の無念さや辛さを慮ることも、決して忘れてはならないと思うのです。

今

から十数年も前のことです。当時私は定時制高校に勤務していました。夜間部の新入生に四十代の女性が入学してきました。謙虚で慈しみのある女性でした。入学する動機を尋ねると、パートで勤務している店舗の主任になるためには、資格を取らなくてはならないそうで、その資格を得るためには高卒が条件の試験を受けなければならぬが、彼女は中卒。主任となるための試験を受験するために高校に入学したということでした。彼女が高校に入らなかった理由を聞くと、父親が女性は高校に行かなくと

も良いという考えで、彼女は高校への進学を諦めたということでした。しかし、今自分が歩むべき道筋に高卒の資格が必要になり、一念発起をして高校受験をしたのです。それには、もう一つ大きな後押しがありました。それは彼女の息子さんが大学に入る事でした。息子さんは自分も4年間頑張るから、お母さんも定時制で頑張っただけで卒業しようと思われてくれたそうです。そんな経緯を知った先生方は、彼女に生活体験発表という弁論大会に出場することを勧めました。この大会は、県予選を勝ち抜くと全国大会に出場できるのです。本人は勿論、先生方の指導もあり、見事県大会で1位、東京で行われる全国大会に行くことになりました。その為の練習を父親に聞いて貰ったのだそうです。その時父親は、高校に進学させなかったことを彼女に詫びたのだそうです。彼女は、こんな年になって高校に通うことに理解を示し、詫び言を言ってくれた父親に嬉しさこそあれ、恨む気持ちは毛頭無かったと伝えてくれました。そして、こんな機会を与えてくれた学校に感謝しているとさえ言ってくれたのです。そして彼女は全国大会で3位相当の賞を得たのです。それは、ある意味で逆転だと思えます。しかし、その逆転は彼女が父親に逆転したことでも、他の誰かに逆転したことでもありません。彼女は自分自身に逆転したのだと私は思うのです。

人

生には多様な選択肢があります。人生は様々なファクターで組み立てられています。だからこそ不可逆的な時の流れの中に、意外な逆転があるのでしょうか。それを希望というのかも知れないと、私はこの頃思うのです。

(元青森県立北斗高校校長)